

国際遠隔講義を通じたタイ・タマサート大との交流



辻 正次*

International Exchange with Thammasat University,
Thailand Through Distance Learning

キーワード：国際遠隔講義, IT, Polycom, ISDN, タマサート大学
Key Words：① International distance learning ② IT
③ Polycom ④ ISDN ⑤ Thammasat University

1. はじめに

タイ王国タマサート大学Sirindhorn International Institute of Technology(SIIT：シンリンドーン国際工学部)¹⁾との3年にわたる国際遠隔教育を、先般9月22日に無事終了することができた。3年前、岸本前阪大総長、ナリット・タマサート大学学長の挨拶から始まった遠隔教育もあつという間、終了した感がする。国際遠隔教育は阪大にとって初めてであり、その実施はまさに試行錯誤の連続で、大小のトラブルが発生する度に改善を繰り返したが、その努力が大きな国際交流という成果に結びついたと確信している。以下では、国際遠隔教育の概要を簡単に述べ、それが果たした国際交流での役割について考えてみることにする。

- 1) SIITは、1992年に日本の経団連とタイ産業連盟によって、国際機関や国際企業で活躍できるエンジニアを育成する目的で設立された。1996年に国王によってSirindhorn International Institute of technology(SIIT)と名付けられたが、Sirindhornは、科学教育に熱心な王女の名前からとられた。今年度の新入生は約1,600名である。

2. 遠隔教育の概要

本プロジェクトは、平成14年度から当初2年間の



* Masatsugu TSUJI
1946年2月生
1976年スタンフォード大学大学院経済学博士課程修了
現在、大阪大学・大学院・国際公共政策研究科、教授、Ph.D., 経済学
TEL 06-6850-5632
FAX 06-6850-5632
E-Mail tsuji@osipp.osaka-u.ac.jp

予定で、放送文化基金(HBF)、国際コミュニケーション基金(ICF)、および電気通信普及財団(TAF)の三財団(以下、それぞれの頭文字を取ってHITと呼ぶ)より資金助成を得て実施したものである。しかし、受講生をはじめとして各方面から高い評価を受け、HITからさらに一カ年の支援を受けることができた。本プロジェクトは「ITとその応用」と題して、日本でのIT研究やその応用の現状を紹介するとともに、タイ国におけるITの発展、特に通信・放送分野での人材育成に協力することが目的である。実施に当たっては、サイバーメディア・センター、国際公共政策研究科(OSIPP)、情報科学研究科が中心となり、講義科目や講師の編成を行った。その講義内容は、ITに関する工学的側面とその経済社会への応用から構成されている。

講義は毎年、6月から9月まで、週一回午後5時(バンコック時間午後3時)から90分、12~14回の講義を行った。3年間を通して、36回の講義を実施したことになる。その対象は、一昨年はSIITの電子工学専攻の3,4年生30名、昨年はこれと通信技術、情報技術の3コースの60名、そして本年度は経営工学(MOT)の学生が加わり、総数90名となった。

設備としては、遠隔講義で世界標準となっている米国Polycom社製のテレビ会議システムViewStation SP(今年度はFX)を利用した。通信回線のネットワークは、日本国内ではNTTのPSTN、国際回線はKDDI(14,15年度)、NTTコミュニケーション(16年度)のISDN回線(伝送速度128Kbps)、タイ国内ではタイ電話会社の回線から構成されている。

3. 国際交流としての遠隔教育

本遠隔教育を通じて、SIITの講師スタッフならびに学生に対して、日本での情報技術の最新の研究・

開発情報を提供できた。事実、SIITから、「阪大等の講師による講義によって、学生の知識、視野、さらには考え方が広げられ、通常のクラス講義では得られない貴重な経験が出来た。これらの講義は、卒業を控えた学生には特に有益で、就職の準備や進学に当たっての専攻の選択に役立った。」との評価が寄せられている。

双方向の遠隔講義であるので、授業環境も通常クラスと変わらず、効果的に配信され、特に2年目に配信方式を改めた結果、画像、音声とも大幅な改善が見られた。本プロジェクトによる遠隔講義は、SIITでの講義のために日本から講師を派遣する、あるいは伝送方式として衛星を用いるシステムより、はるかに低コストで効果的である。

本年度からは、双方向性を活用する二つの新しい取り組みを行った。まず、講義を阪大生に開放したことである。OSIPPとサイバーメディア・センターでは、阪大生や幾人かの留学生も講義が英語ということで受講した。次に、SIITの院生による研究発表のセッションを2回設けたことである。合計6名の院生が阪大に向かってプレゼンテーションを行い、阪大の教授がそれに対してコメントを行った。それぞれの研究はいずれも高度なもので、阪大の教授方も驚いておられた。

その後、SIITから、阪大の教授に博士学位審査のための学外委員に就任してほしいとの要望が寄せられた。遠隔講義システムを通じて阪大教授が、SIITの博士の学位審査に参加することは、まさに国際学术交流の新しい形態となる。このように、コスト・パフォーマンスのよい国際遠隔教育システムは、アイデア一つで今後も様々な形での国際交流を可能にすると思われる。

4. 今後の課題

毎回講義の後で受講生にアンケートを行ったが、その中で問題として指摘されていたのが、日本人講師の英語である。つまり、日本人特有のアクセント

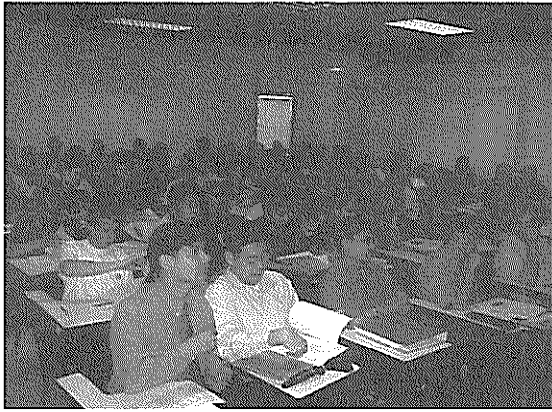
があり、その英語が理解できないという学生が少なくなかった。これは毎年指摘されていたので、その対策として、講師にはっきりと、しかもゆっくりと話すようお願いし、また講義資料を配布したが、最後まで改善されなかった。

一人の講師が、すべての講義を担当できればSIITの学生の状況に合わせた講義が可能であり、また彼らも講師の英語に慣れてくるという、両者での学習効果が発揮される。しかし、今回のタイとの遠隔教育の特徴は、日本の先進分野の専門家が講義をすることであり、その都度講師が変わり、結果的には英語の問題は改善されないままであった。

講師の多くは海外でのコンファレンスや国際会議の経験が豊富であり、そのようなプレゼンテーションに準じた講義資料を作成されたものと思われる。しかしながら、ISDNを用いた遠隔講義では、音声や画像の質がよいといっても、face-to-faceの講義とははるかに異なっている。

遠隔講義の方法としては、本プロジェクトのような「放送型」に加えて、「PC-CD型」も普及している。前者は講師と受講生がリアルタイム・双方向で対するものであり、後者は受講生が自分の時間のあるときに、PCに向かい講師の作成したCDやDVD等を見ることができ、学習していくものである。この場合は、受講生の理解は全面的に講義資料に依存している。「放送型」ではそこまで講義資料を準備する必要はないが、国際遠隔講義での共通語が英語であるならば、日本人の英語力を補完するものとしてそれなりの教材の準備も求められるであろう。

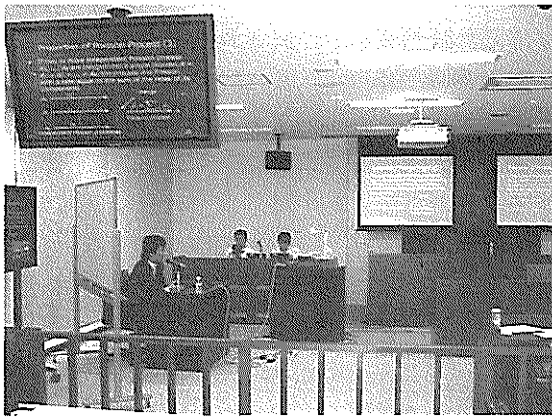
今年度は大阪大学中之島センターで講義を行った。そこにはTandberg社製の遠隔講義システムが設置されているが、SIITのPolycomと親和性が悪く鮮明な画像が送れないので、それを用いなかった。今後は遠隔講義の機器設備の選択や、ISDNとインターネットといったネットワークの選択も、効果的な国際遠隔教育にとって重要となってくるであろう。



SIITでの受講風景



SIITでの受講風景2



大阪大学中之島センターでの受講風景

